



Title	ウイルタ語北方言調査の課題と展望
Author(s)	山田, 祥子
Citation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed., 11-26
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/38295">http://hdl.handle.net/2115/38295</a>
Type	proceedings
Note	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
File Information	02yamada.pdf



[Instructions for use](#)

## ウイльта語北方言調査の課題と展望 \*

山田 祥子

(北海道大学大学院 博士課程)

### 0. はじめに

サハリンの先住民族ウイльтаの話す言語であるウイльта語には、ワール (Val) などを含む北の地方とポロナイスク (Poronajsk) などを含む南の地方との間で方言差があるといわれてきた (Novikova & Sem 1997: 214, 池上 2001[1994]: 249)。しかし、両方言を体系的に比較・対照する研究はこれまでのところ池上 (2001[1994]; 以下、初出年は省略) に限られ、その差異の問題には依然として未解明の部分が多く残っている。

現在、ウイльта語の話者数は全員数えても 20 名に満たないとまでいわれている<sup>1</sup>。このような危機的状況のなか、言語の保持・伝承に対する話者や研究者たちの積年の思いが結実し、2008 年 4 月この言語初の文字教本 (Ikegami et al. 2008) が出版された。その内容は、南北の地方で異なる語形を併記するなど、この言語の方言差の存在をはっきりと意識させるものとなっている。これは、研究者の意図だけでなく、編集に携わった話者たちによる方言区分の認識と志向が如実に反映された結果であるといえよう。しかし、その表記のなかには一貫しない部分も少なからずあり、ここにも今後のより体系的かつ詳細な方言の記述研究の必要性がうかがわれる。

そこで本稿は、今後のウイльта語方言研究において注目すべき課題を提示することにより、本研究の意義と展望を打ち立てることを目標とする。ここでは一貫して、池上 (2001) による方言分類にもとづき、南方言を基準とした北方言の相違点を述べるという流れで論を展開する。ただし、本稿で述べるいずれの相違点も今後の調査に向けての問題提起であり、あくまでも今後の検討を要するものであるということをあらかじめことわっておく。

全体の構成は以下のとおりである。まず 1. では、ウイльта語の方言分類に関する先行記述を概観する。次いで 2. では、池上 (2001) の記述にもとづく課題を 4 点取り上げ、今ある資料から再検討する。3. では、筆者自身がこれまで南方言を中心に検討してきた課題 2 点について、方言の観点から再解釈する必要性を提示する。最後に 4. で、結論としてこれまでの論点をまとめ、今後ウイльта語北方言の調査を行なう展望を述べる。

### 1. ウイльта語の方言分類

#### 1.1 地域グループ

Roon (1996: 13-14) は、18～20 世紀のウイльтаの居住域を次のように二つの地域グループ

---

\* 本稿は、シンポジウム「サハリンの言語世界」における同タイトルの口頭発表の内容を加筆・修正したものである。なお、発表後に筆者がサハリン州北部で行なった調査による成果は、原則として本稿の内容に含めない。

<sup>1</sup> 2007 年 10 月に話者の一人である E. A. ビビコワ氏がウイльта語を話せる人物の名前を挙げて数えたところ 16 名であった (津曲敏郎氏による聴取にもとづく)。そのうち、北方言の中心地とされるワールの出身は 12 名、南方言の中心地とされるポロナイスクの出身が 4 名である。

に分けて説明する。地名等の位置関係については、**図1**を参照されたい。

- ・ 南部ウイルタ (*sunneni*) : 春夏季はチェルペーニヤ (Terpenija) 湾とポロナイ (Poronaj) 川地域で暮らし、冬には東サハリン山脈へと移動した
- ・ 北部ウイルタ (*doronnei*) : 春夏季はシュミット (Shmidt) 半島からルンスキー (Lun'skij) 湾までのオホーツク海沿岸地域に、秋冬季は北サハリン平野と東サハリン山脈に分布した

つまり、おもに春夏季の拠点によって「南部ウイルタ (*sunneni*)」と「北部ウイルタ (*doronnei*)」に分けられる。同書によれば、分布域のはっきりとした境界線はなく、かつては地域グループを明確に分けることはなかった。二つのグループの分離は、20世紀初め、北緯50度線に日露間の国境を確定したサハリン分割にともなうものであったという。

## 1.2 方言分類

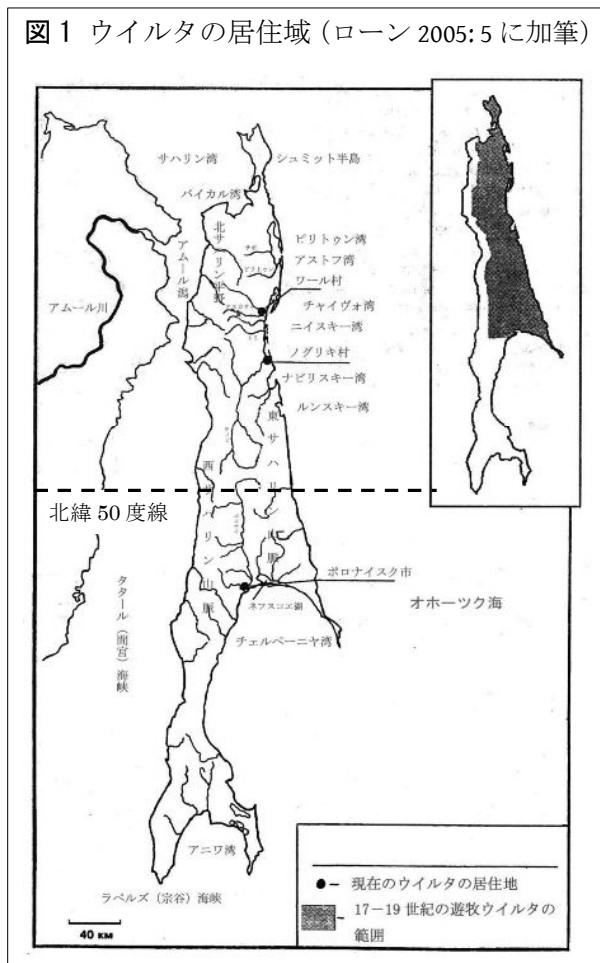
上述の地域グループは、そのままウイルタ語の方言分類に適用される。Novikova & Sem (1997: 214) は、「*doronnei* とよばれる地域グループの話す北方言 (東サハリン方言) と、

*sunneni* とよばれるグループの話す南方言 (ポロナイスク方言) の二つの方言に分かれる」と述べている。また、戦後北海道へ移住した少数のウイルタは後者のグループに属し、南方言を話すことについても言及した (ibid.: 202)。だが、両方言の相違点については記述していない。

また、近年のウイルタ語の状況や特徴を概説する Ozolinja (2002) は、歴史的には同様の方言区分を認めるが、共時的には方言を区別しないという立場を示した。同著者により前年に出されている辞書 (Ozolinja 2001) でも方言を区別していない。

一方、池上 (2001: 247-248) は、ポロナイスク (旧、敷香) を中心とする地方で話されるウイルタ語を「南方言」、ワールを中心とする地方で話されるウイルタ語を「北方言」と定義した。この定義は上述の Roon (1996) による地域グループの区分や Novikova & Sem (1997) の方言分類と共通する。また池上 (2001) も、南・北の地方の方言の顕著な境界がどこかに

図1 ウイルタの居住域 (ローン 2005: 5 に加筆)



あったか、あったならばどのあたりにあったか、および、小地域ごとの方言がいくつも分布していた可能性などの問題は明らかになっていないとして明確な方言区域は定めていない。そして、差異の大きさについては、「南・北方言の話し手たちはそれぞれ、他方の方言で話されるのを理解できるようであり、両方言の差異は異なる言語間におけるほどの大きな差異ではない」（池上 2001: 247）という概略的な説明にとどめている。

### 1.3 先行記述：池上（2001）

前節で述べたように、ウイлта語に南北で方言差がある（あるいは、あった）ことは広く認められており、その方言区域に対する見解もみな共通している。だが、管見のかぎり、二つの方言の比較を積極的に行なう研究は池上（2001）のみである。そこで、本節では今後の議論の前提として、池上（2001）の内容を概略する。

池上（2001）は上述のように暫定的な方言分類をしたうえで、両方言の相違点を「音韻」「文法」「語彙」に分けて記述した。表 1 で、その論点（①～⑨）を一覧する。

表 1 池上（2001）によるウイлта語方言比較の論点（本稿筆者によるまとめ）

音韻	文法	語彙
① 唇音・軟口蓋音の順序	⑤ 不完了動名詞語尾の融合	⑨ 260 余りの基礎語彙の対照表
② 母音間の x    k	⑥ 動詞語尾-bukki	
③ 母音間の ø    g	⑦ 名詞述語構文 <sup>2</sup>	
④ iga~ee    iga~aa, iga~ee    iga~ææ	⑧ 所有構造	
①⑥⑦⑧について、北方言とエウエンキー語サハリン方言との類似点を指摘		

\* 通し番号は本稿筆者による \* ②～④：(南方言) || (北方言)

同論文でもっとも注目される点のひとつは、表 1 でも示したように北方言とエウエンキー語サハリン方言との間の類似を指摘したことである。ここでは、表 1 の①の例を挙げる。次の例(1)はウイлта語の南方言・北方言の語形、(2)はエウエンキー語サハリン方言の語形であり、いずれも基数詞「8」を表わす。ただし、ウイлта語北方言では話者によって南方言と同じ語形も用いられる。

(1) **Uis.** ĵakpu 「8」 || **Uin.** ĵakpu, ĵapku 「8」 (池上 2001: 249)

(2) **EvS.** ĵapkun 「8」 (ibid.: 275)

つまり、ウイлта語南方言では軟口蓋音・唇音の順（上例では[kp]）になるのに対し、北方言では唇音・軟口蓋音の順（上例では[pk]）になる音位転倒が見られる。また、エウエンキ

<sup>2</sup> ここにいう名詞の意味には実詞と形容詞を合わせて含めている（池上 2001: 252）。

一語サハリン方言では唇音・軟口蓋音の順（上例では[pk]）である。

池上（2001: 276-277）によれば、ウイльта語南方言の順序の型（例：[kp]）は、系統的な親縁関係の近いナーナイ語のナイヒン方言などや、ウルチャ語と、ウイльта語でかつて起こった音位転倒によって生じた型であり、ウイльта語北方言の順序の型（例：[pk]）はそれよりさらに後の改新である。つまり、南方言がナーナイ語やウルチャ語と共通する系統的特徴を保持するのに対し、北方言ではエウエンキー語との接触による干渉を受けてエウエンキー語サハリン方言と類似の型が生じたのだという。

そのほかに、動詞語尾-bukki、名詞述語構文、所有構造の3点（表1の⑥⑦⑧）についても、ウイльта語の両方言とナーナイ語、ウルチャ語、エウエンキー語サハリン方言と比較したうえで、ウイльта語北方言とエウエンキー語サハリン方言との類似を指摘している。

以上見てきたように、池上（2001）はウイльта語の方言差をこれまででもっとも詳細に記述した点、さらにその問題を近隣言語との比較へ発展させた点できわめて重要である。だが、その成果と同時に、方言分類の詳細（境界線やさらなる下位方言の存在）や差異の程度などについて、まだ十分に説明できない問題を多く残している。その意味で、池上（2001）は今後のウイльта語研究に向けた大きな問題提起でもある。とくに、池上（2001）では南方言に対して北方言の資料が少なかったため、上記表1（①～⑨）の論点いずれをとってみても、今後北方言の資料を補ってから再度検討する必要性が含まれている。

だが、現段階ではっきりと北方言の資料としてまとまったものは、筆者の把握するかぎり、池上（2002）に載る北方言の口頭文芸テキストのみである。上述のようにロシアの研究者による記述は方言を積極的に区別していないため、採集した地方が概略わかったとしても、それが北方言だと断定することは難しい。したがって、北方言の資料を補う現地調査こそ目下の課題といえよう。

## 2. ウイльта語北方言調査の課題(1)：池上（2001）をもとに

以上に述べた前提を踏まえ、以下2.および3.では、ウイльта語北方言の調査の際に着目したい課題を提示する。まず本節2.では、池上（2001）の記述にもとづく課題を4点取り上げ、別の資料による情報も一部参照しながら考察を加える。

### 2.1 音素目録と音価の相異

本研究では、池上二良氏が南方言の調査・研究によって考案した音素目録、すなわち母音音素として a, ə, o, ɐ, u, i, e、子音音素として p, b, t, d, k, g, m, n, ɲ, l, r, w, s, j, x, č, ʃ（池上1997ほか）を用いる。また、2008年4月に出版されたウイльта語文字教本（Ikegami et al. 2008）によって公式に提案された書記法における文字体系も、キリル文字表記や長母音が補助記号で表わされる点などを除いては、原則として上記の音素目録をもとに策定されたものである。

池上（2001: 249）も指摘するように、南方言と北方言はともに同じ音素目録をもつとみられる。だが、それぞれの音価には、個人差だけでなく方言差があることは十分に考えられる。調査の際は、この点に細心の注意を払う必要がある。

## 2.2 母音間の単一の無声軟口蓋閉鎖音

南方言にもとづくウイльта語の音韻形態論では、母音間の単一の無声軟口蓋閉鎖音  $k$  [k] が消失するという規則的な変化が認められる。たとえば、池上 (2004 [1990]; 以下、初出年は省略) の指摘する語彙借用のプロセスにおいてその現象が顕著である。下の例(3)は日本語からウイльта語に借用された語彙とされるが、借用元の日本語では母音間に  $k$  があるのに対し、ウイльта語に入ると  $k$  が失われている。また、例(4)(5)は日本語からアイヌ語を経由してウイльта語に入ったと考えられているが、ここでも  $k$  の消失はウイльта語に入ってから起こった変化であると見られている。

- (3) *Jap.* masakari (マサカリ) > *Uil.* masaari 「斧」 (池上 2004: 281)  
 (4) *Jap.* osiki (ヲシキ [折敷]) > *Ain.* otcike > *Uil.* oččii 「膳、盆」 (ibid.)  
 (5) *Jap.* sintoko (シントコ [ほかゐ]) > *Ain.* sintoko > *Uil.* sittoo 「たる」 (ibid.)

ここで、母音間の単一の  $k$  が語末の音節にあった場合、主格語幹では失われても、対格語尾  $-bA^3$  を融合した対格形では代償重音化により重複した  $kk$  として保たれる (池上 2004: 282-283)。たとえば、(4)の oččii 「膳、盆」、(5)の sittoo 「たる」の対格形はそれぞれ oččikkee 「膳を、盆を」、sittokkoo 「たるを」となる。

同様に、以下(6)~(9)に例示する名詞でも、かつては語幹末の母音間に  $k$  があったが (例: \*giləkə)、主格ではそれを消失あるいは  $g, w, j$  に変化させ (例: giləə)、対格では代償重音化による  $kk$  というかたちで保っている (例: giləkkəə) と考えられている (Ikegami 2001a [1956]: 23; 以下、初出年は省略)。<sup>4</sup>

(6) 母音間の  $k$  が消失 (\* $k > \emptyset / V\_V$ ):

giləə (< \*giləkə) 「ニヴフ人」 +  $-bA$  (ACC) > giləkkəə 「ニヴフ人を」

(7) 母音間の  $k$  が  $g$  に交替 (\* $k > g / V\_V$ ):

oljiga (< \*oljika) 「炉かぎ」 +  $-bA$  (ACC) > oljikkaa 「炉かぎを」

(8) 母音間の  $k$  が  $w$  に交替 (\* $k > w / V\_V$ ):

əmuwə (< \*əmuəkə) 「ゆりかご」 +  $-bA$  (ACC) > əmukkəə 「ゆりかごを」

(9) 母音間の  $k$  が  $j$  に交替 (\* $k > j / V\_V$ ):

čuuji (< \*čuuki) 「足のつけね」 +  $-bA$  (ACC) > čuukkee 「足のつけねを」

((6)~(9): Ikegami 2001a: 16-21 の語形変化表にもとづく)

池上 (1997) の提示する南方言の語彙のなかで母音間に単一の  $k$  が立つものがないわけではない (例: ajakaanji 「良く」、siikə 「漁網を縫う糸」など)。だが、上述の規則的な音韻変化は、ウイльта語において母音間で単一の無声軟口蓋閉鎖音の出現になんらかの制約があ

<sup>3</sup> 以下、大文字の  $A$  は母音調和によって交替する母音を表わす。

<sup>4</sup> cf. 基本語幹に母音間の  $k$  をもたない名詞の対格変化例:  $nəə + -bA > nəəwə$  「海に入る大きな川の河口近い部分を」 /  $muigi + -bA > muiggee$  「ヘビを」 /  $dawa + -bA > dawwaa$  「サケを」 /  $kuuji + -bA > kuujjee$  「アイヌ人を」 (池上 1997 にもとづく)

ることを想起させる。<sup>5</sup>

ところが、池上（2001）で提示された方言によってかたちの異なる語彙のなかには、北方言のかたちにおのみの母音間に単一のkが出現する例がいくつか見出される。その例を、以下(10)～(12)で対応する南方言の語形とともに列挙する。

(10) <i>UiS.</i>	apaačči-ni		<i>UiN.</i>	apakaačči-ni, apaačči-ni	「寝る、寝ている」
(11a) <i>UiS.</i>	amma		<i>UiN.</i>	amaka	「お父さん」
(11b) <i>UiS.</i>	ənnə		<i>UiN.</i>	ənəkə	「お母さん」
(12 a) <i>UiS.</i>	laxa		<i>UiN.</i>	laka	「近い」
(12 b) <i>UiS.</i>	duxu		<i>UiN.</i>	duku	「家」
(12 c) <i>UiS.</i>	burixə		<i>UiN.</i>	burikə, burikka	「弓」

((10) : 池上 2001: 268、(11a,b) : *ibid.*: 265、(12a,b,c) : *ibid.*: 250)

これらの例から、北方言においては母音間のkが許容されやすい、すなわち、北方言では母音間における無声軟口蓋閉鎖音の制約が南方言よりも弱いのではないかと推測される。もっとも、上の(10)～(12)で明らかのように、北方言のkに対応する南方言の音韻は一様ではない。また、池上（2001）の提示した基礎語彙260余語のうち該当するのは上の6例に限られるため、これだけでは推測の域を出ない。今後はより多くの語彙資料を補い、広く検討していく必要がある。

### 2.3 不完了動名詞語尾の融合と接着

ウイльта語では、語幹と語尾もしくは語尾と語尾の間でしばしば子音の代償反復や母音の長音化などをともなう複雑な結合が起こる。こうした結合のことを、総称して「融合」とよんでいる。南方言にもとづく従来の記述では、原則として、どのような場合に融合が起こるかは語尾の種類と語幹末の音韻構造によって決まっている（Tsumagari 2009: 4, 津曲 1988: 745）。

たとえば、南方言にもとづく音韻形態論では、語幹末尾に母音音素ひとつだけという音韻構造(-CV#)の動詞に不完了動名詞語尾-riがつく場合、融合が起こると考えられてきた（Ikegami 2001b [1959], Tsumagari 2009 ほか）。(13)(14)は、その典型的な例である。なお、以下の例文で挿入するグロスはずべて筆者による。

(13) <i>UiS.</i>	ɲənə	+	-ri	+	-ni	>	ɲənnē-ni	「(彼が) 行く」
	go	+	IM	+	3SG	>	someone's going	
(14) <i>UiS.</i>	sinda	+	-ri	+	-ni	>	sinʃee-ni	「(彼が) 来る」
	come	+	IM	+	3SG	>	someone's coming	

<sup>5</sup> 有声軟口蓋閉鎖音[g]の音素gは、母音間で単一の場合、通常弱い摩擦音[ɣ]で発音される（池上 1997: xiv、Tsumagari 2009: 2）。例：əgə [əɣə]「お姉さん」、kučigə [kuʧɣə]「小刀」（池上 1997: xiv）したがって、有声軟口蓋閉鎖音[g]もまた、無声の[k]と同様に母音間において単一では起こりにくい。

ところが池上（2001: 251）は、北方言では(13)(14)のような不完了動名詞語尾-riの「融合形」のほかに、融合せず単純に接着するかたち「接着形」が見られると新たに指摘した。表2は、この指摘をまとめるものである。

表2 不完了動名詞語尾の融合形と接着形（池上 2001: 251 にもとづく作表）

	南方言	北方言
ɣənə+ri+ni go+IM+3SG	【融合形】 ɣənnee-ni	【融合形】 ɣənnee-ni 【接着形】 ɣənə-ri-ni
sinda+ri+ni come+IM+3SG	【融合形】 sinjee-ni	【融合形】 sinjee-ni 【接着形】 sinda-ri-ni

また、北方言に見られるこの融合形と接着形は意味がやや異なるという（ibid.）。しかしながら、話者による主張の違いがあり、池上（2001）は意味の区別について断定的な見解を示していない。用例も上記の動詞二つ（ɣənə-「行く」、sinda-「来る」）に限られ、池上（2002）などに載る北方言テキストにも接着形にあたるかたちは見られない。

仮に、表2のように、同一の語尾の結合形に二つの系列が認められるとすれば、北方言では南方言とは異なる動詞活用のパラダイムを認めるべきかもしれない。これは、ツングース語のなかでもウイльта語に際立った特徴とされてきた融合という現象を考えるうえでも、軽視できない問題と思われる。したがって、この問題についても北方言の用例をより多く集めて検討し、そのうえで意味の違いを詳しく調べる必要がある。

#### 2.4 名詞述語構文

池上（2001）による先行記述のうち、統語論上の問題としては名詞述語構文と所有構造の2点がある（表1参照）。池上（2001）はこのどちらについてもエウエンキー語サハリン方言からの影響を受けている可能性を示唆している。だが、同時に、いずれの点においても南方言に対し北方言の例が非常に少ないため、今後の検討の余地を多く残している。そこで、本節では二つの問題点のうち名詞述語構文を取り上げ、とくに過去形の人称標示に焦点をしばって考察する。<sup>6</sup>

まず、南方言から過去の名詞述語構文の例を挙げる。(15)は一人称単数、(16)は二人称単数、(17)は三人称単数の主語に対し、動詞bi-の動名詞完了形 bičči(n)-がコンピュータの役割を果たす。

(15) *UIS.*    bii                            saldaa    biččim-bi.  
                 1SG.NOM                            soldier    COP+PRF-1SG                            「おれは軍人だった。」

<sup>6</sup> 名詞述語構文以外の構文において、述語動詞は一般に動名詞（形動詞ないし分詞形）をとり、所有人称語尾-bi (1SG), -pu (1PL), -si (2SG), -su (2PL), -ni (3SG), -či (3PL)をつけて主語の人称を標示する。例：tari nari ɣənə-xə-ni. (その人行く+PRF-3SG) 「彼が行った。」 この点に方言差は指摘されていない。



- (16) **Uis.**    sii                    saldaa    bičči-si.  
                  2SG.NOM                    soldier    COP+PRF-2SG                    「きみは軍人だった。」
- (17) **Uis.**    tari    nari                    saldaa    bičči.  
                  that    man                    soldier    COP+PRF                    「その人は軍人だった。」
- ((15)~(17) : 池上 2001: 253)

(17)の三人称単数の場合のみコンピュータに人称語尾がつかないことを確認できる。

また、複数の場合は以下のように表わされる。(18)は一人称複数、(19)は二人称複数、(20a)(20b)はいずれも三人称複数で、やはり動詞 bi-の動名詞完了形 bičči(n)-がコンピュータの役割を果たす。

- (18) **Uis.**    buu                    saldaa(-l)                    biččim-pu.  
                  1PL.NOM                    soldier(-PL)                    COP+PRF-1PL                    「おれたちは軍人だった。」
- (19) **Uis.**    suu                    saldaa(-l)                    bičči-su.  
                  2PL.NOM                    soldier(-PL)                    COP+PRF-2PL                    「きみらは軍人だった。」
- (20a) **Uis.**    tari    nari-sal    saldaa(-l)                    bičči-l.  
                  that    man-PL    soldier(-PL)                    COP+PRF-PL                    「その人らは軍人だった。」
- (20b) **Uis.**    tari    nari-sal    saldaa-l                    bičči.  
                  that    man-PL    soldier-PL                    COP+PRF                    「(同上)」
- ((18)~(20b) : 池上 2001: 253)

ここで、三人称複数(20a)のコンピュータにつく-lは、普通、名詞につく複数接尾辞であり、人称に関してはやはり無標である。つまり、(15)~(20b)を総じて、南方言における過去の名詞述語文では、三人称に限って通常の人称語尾-ni (3SG) /-či (3PL) がつかないことが確認される。言い換えれば、三人称が-∅ (ゼロ) で表わされる (池上 2001: 255)。なお、これは、動名詞ではなく定動詞の人称標示の方法と共通している点でも注目される (ibid.: 256)。

ところが、北方言では過去の名詞述語構文に三人称の人称語尾-ni (3SG) をつける例が見られる。(21)~(23)はいずれも池上 (2001: 256-257) の示す北方言の例である。南方言の例(17)と対照されたい。なお、以下の例文中においてイタリックはロシア語の単語を表わす。

- (21) **Uin.**    *eto*    *pervyj*    *mama-ŋu-ni*                    bičči.  
                  it    first    old.woman-AL-3SG    COP+PRF  
                  「これは最初にめとった彼のつれあいであった。」
- (22) **Uin.**    *amič-či*    *əni-ni*                    *lilak*    *mama*                    bičči-ni.  
                  father-3PL    mother-3SG                    Lilak    old.woman                    COP+PRF-3SG  
                  「かれらの父の母がリラクばあさんであった。」
- (23) **Uin.**    *tari*    *oŋdo*    bičči-ni.  
                  that    monster    COP+PRF-3SG  
                  「それは魔ものであった。」
- ((21)~(23) : 池上 2001: 257)





方言の資料を補って再検討する必要性が残っている。Malchukov (2003: 242) によれば、エウエンキー語ではロシア語の影響によって SVO 型語順が本来の SOV 型語順と同頻度で見られるようになってきているという。今日のウイльта語話者がすべてロシア語とのバイリンガルであることを考慮すると、ロシア語の語順が彼らの話すウイльта語に影響している可能性は非常に高い。その点で、ウイльта語のうちでもロシア語との接触の期間がより長い北方言と、その期間がより短い南方言との間でどのような差異があるかは興味深い問題である。

ただし、池上 (2002) のテキストは、南方言の話者のなかでも旧日本領樺太から北海道へ移住したウイльта語南方言の話者による語りを中心になっている。一方、今日では北方言だけでなく南方言の話者もロシア語の影響を強く受けていることは間違いない。そのため、今日のウイльта語では語順に方言差は認められないだろうと推測する。今日の南方言の状況も調べたうえで、方言差とは別の問題として扱うべきかもしれない。

### 3.2 口頭文芸における伝聞形式

山田 (2008) は、池上 (2002) に収められているウイльта口頭文芸のうちで非常に頻繁に用いられる伝聞の語尾-ndA の特徴を記述し、ウイльта語と地理的に接触のあるアイヌ語、ニヴフ語との比較を試みた。本節ではウイльта語における伝聞形式の出現頻度について、方言差の観点から考察を加える。

山田 (2008: 65) では、池上 (2002) のうち散文形式の口頭文芸 23 篇に含まれる地の文のうち、約 5 割がその述語末に伝聞の語尾-ndA をつけると述べた。さらに、この-ndA の用例のうちの 8 割以上が、後ろに感嘆の語尾-kAA を融合したかたち-ndAA (感嘆融合形) をとる (ibid.: 64)。この指摘を総じると、地の文全体における比率は「伝聞+感嘆 (-ndAA) : 伝聞のみ (-ndA) : その他<sup>9</sup> = 4 : 1 : 5」という計算になる<sup>9</sup>。以下、(27)は「伝聞+感嘆 (-ndAA)」の例、(28)は「伝聞のみ (-ndA)」の例である。すなわち、地の文全体の約 4 割は(27)のような形式をとる。

(27) *Uis.* teje-buŋji            čai-wa    puijuu-xə-ni-ndəə.  
entertain-CVB        tea-ACC    boil-PRF-3SG-HS+EXC  
「ご馳走するために茶をわかしたんだと。」 (池上 2002: 45)

(28) *Uis.* ulaa-takki            isu-xa-ni-nda.  
reindeer-REF.DIR    come.back-PRF-3SG-HS  
「自分のとなかいへ帰ってきたんだと。」 (ibid.: 46)

なお、伝聞の感嘆融合形-ndAA の用例は、(29)(30)のように南方言の談話文例集である北川 (1988) でも見つかっている。したがって、これまでのところ、少なくとも南方言では-ndAA

<sup>9</sup> 語り手によっては推量を表わす小詞 *taani* を伝聞として用いることがある。この用法による伝聞形式は地の文の約 1 割を占める。これを含めると、上記の比率は「伝聞+感嘆 (-ndAA) : 伝聞のみ (-ndA) : *taani* の伝聞用法 : その他 4 : 1 : 1 : 4」という計算になる。つまり、語尾-ndA と小詞 *taani* の伝聞用法を合わせた伝聞形式は、地の文全体の約 6 割を占める。

という形式が口頭文芸以外の日常会話でも用いられるものであると考えている。<sup>10</sup>

(29) *Uis. issi-ni-ndaa.*

come.back+IM-3SG-HS+EXC

「彼が帰って来るんだと。」

(北川 1988: 33)

(30) *Uis. ilamau-si-či-ndaa.*

be.ashamed-IM-3PL-HS+EXC

「彼らは恥ずかしいそうだ。」

(ibid.: 26)

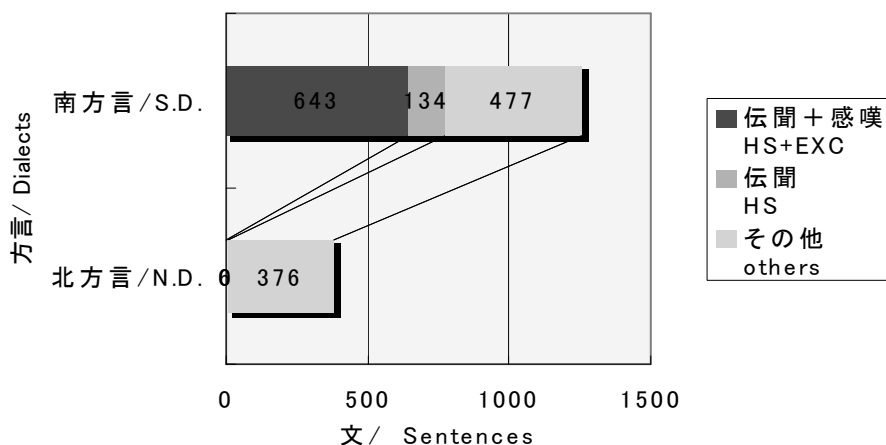
さて、研究対象とした口頭文芸 23 篇には、南方言のもの 19 篇（計 1488 文、うち地の文 1254 文）、北方言のもの 4 篇（計 422 文、うち地の文 382 文）が含まれているが、山田（2008）では方言別の考察は行なわなかった。そこで、同じ 23 篇を対象に、伝聞形式の使用頻度を方言で分けて文の数で計算したところ、表 5 のような結果となった。また、同じく図 2 は、表 5 の数値をグラフ化したものである。

表 5 池上（2002）の散文口頭文芸における伝聞形式の方言別出現頻度（単位：文）

	伝聞+感嘆 -ndAA	伝聞のみ -ndA	その他	地の文合計
南方言	643 (51%)	134 (11%)	477 (38%)	1254 (100%)
北方言	0 (0%)	6 (2%)	376 (98%)	382 (100%)
計	643 (39%)	140 (9%)	843 (52%)	1636 (100%)

\* 各区分の%値は、行ごとの「地の文合計」に対する割合を示す

図 2 池上（2002）の散文口頭文芸における伝聞形式の方言別出現頻度（単位：文）



<sup>10</sup> なお、北川（1988）は文脈のない文例集であるため、同書によって伝聞形式などの使用頻度を調べることはできない。

表 5・図 2 では、以下の点が見てとれる。第一に、南方言に比べて、北方言では伝聞形式の出現頻度が圧倒的に少ないということである。南方言では地の文 1254 文のうち 777 文 (伝聞+感嘆 643 文と伝聞のみ 134 文の合計) すなわち地の文の 62% が伝聞形式をとるのに対し、北方言では地の文 382 文のうちわずか 6 文 (伝聞+感嘆 0 文と伝聞のみ 6 文の合計) すなわち地の文の 2% しか伝聞形式をとらない。

第二に、南方言の口頭文芸によく見られる伝聞の感嘆融合形-ndAA の用例が、池上 (2002) による表記を見るかぎりでは北方言では見つからないということである。南方言では 643 文 (地の文の 51%) が伝聞の感嘆融合形-ndAA をとるのに対し、北方言では 0 文であった。

ここまでの考察によって、山田 (2008) でウイлта口頭文芸の特徴であると主張した伝聞形式は、実はウイлтаのなかでも南方言に限定される特徴になっているという可能性が出てきた。もっとも、表 5・図 2 を見ても明らかであるように、そもそも研究対象とする地の文の全体数が不均等であり、確かな検討のためにはまず北方言の口頭文芸資料を補う必要がある。また、南方言・北方言いずれにおいても語り手の数は非常に限られているので、方言差の前に個人差の可能性にも十分に留意しなければならない。

#### 4. 結論

以上、本稿では池上 (2001) による方言分類にもとづき、これまでのウイлта語研究から引き継ぐ北方言調査の課題として次の 6 点を挙げた。

- ・ 音素目録と音価の相違 (2.1)
- ・ 母音間の無声軟口蓋閉鎖音 (2.2)
- ・ 不完了動名詞語尾の融合と接着 (2.3)
- ・ 名詞述語構文 (2.4)
- ・ 語順 (3.1)
- ・ 口頭文芸における伝聞形式 (3.2)

もちろん、ここに挙げた課題がすべてではない。今後、現地調査を行なっていくなかで初めて問題になることも多いただろう。その意味で、本稿はこれから始まるウイлта語方言の調査・研究の出発点を示したにすぎない。

また、3.1 でもすでに触れたが、池上氏による従来の研究はおもに旧日本領樺太で話されていた南方言を基礎としている。それに対し、今日サハリンで話される南方言は、戦後半世紀以上を経て少なからず変化していると推測される。したがって、本稿ではあくまで北方言調査に焦点を当てたが、実際には今日の南方言を調べることも重要である。さらに、ウイлта語全体の話者数が非常に少ないという状況をかんがみれば、方言差を論じる前に個人差の可能性を十分に考慮しなければならない。そのためには、現地調査に合わせて、ロシアの研究者によるものをはじめとした過去の資料を入念に調べていくことが必要不可欠である。これらの点も、加えて今後の課題としたい。

池上 (2001) が北方言とエウエンキー語サハリン方言との類似を明らかにしたように、ウ

イルタ語の方言差は、サハリンを舞台に接触してきた諸言語との影響関係に深く関わっている。また、他のツングース諸語とウイльта語の相違点を述べるうえでも重要な情報となるだろう。その意味で、今後ウイльта語方言のより体系的な記述は、ニヅフ語の諸方言やアイヌ語サハリン方言、ロシア語、日本語、朝鮮語などとの比較研究につながる可能性を含んでいる。本研究が議論のたたき台となり、将来的に他言語の研究成果と連携したさらなる比較研究が発展することを期待する。

### 略号一覧

- : 形態素境界	+ : 融合	1 : 一人称	2 : 二人称	3 : 三人称
ACC : 対格	AL : 譲渡可能	CVB : 副動詞	COP : コピュラ動詞語幹	
DAT : 与格	DIR : 方向格	EXC : 感嘆	HS : 伝聞	IM : 不完了
NOM : 主格	PL : 複数	PRF : 完了	PRL : 沿格	REF : 再帰
SG : 単数				

**Uil.** : ウイльта語 (方言差にかかわらず一般的と考えられる例)

**Uis.** : ウイльта語南方言      **Uin.** : ウイльта語北方言

**Ain.** : アイヌ語      **EvS.** : エウエンキー語サハリン方言      **Jap.** : 日本語

### 参考文献

- 池上二良 (1997) 『ウイльта語辞典』北海道大学図書刊行会.
- (2001) 「ウイльта語の南方言と北方言の相違点」『ツングース語研究』:247-283, 汲古書院 [初出: 1994 『北海道立北方民族博物館研究紀要』3:9-38].
- (2002) 『増訂ウイльта口頭文芸原文集』(ツングース言語文化論集 16) 文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-013, 大阪学院大学.
- (2004) 「日本語・北の言語間の単語借用」『北方言語叢考』:272-285, 北海道大学図書出版会 [初出: 1990 『北海道方言研究会会報』30:2-11, 北海道方言研究会].
- 北川源太郎 (筆録), 池上二良・津曲敏郎 (訳解) 1988 『ウイльтаのことば(2)』(ウイльта民俗文化財緊急調査報告書 9) 網走市北方民俗文化保存協会.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店.
- 津曲敏郎 (1988) 「ウイльта語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』1:744-746, 三省堂.
- 山田祥子 (2007) 「ウイльта語後置文の機能論的分析」津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』14:87-102, 北海道大学大学院文学研究科.
- (2008) 「ウイльта語口頭文芸の伝聞形式: サハリンにおける言語接触の可能性」『北海道民族学』4:63-71.
- ローン, タチヤーナ (著), 永山ゆかり・木村美希 (共訳), 津曲敏郎・加藤博文 (監訳) (2005) 『サハリンのウイльта: 18-20 世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究』北海道大学大学院文学研究科 [Roon (1996) の翻訳].
- Ikegami, J. (2001a) "The substantive inflection of Orok". In 『ツングース語研究』:3-23, 汲古書

- 院 [初出 : 1956 『言語研究』 30: 77-96, 日本言語学会].
- (201b) “The verb inflection of Orok”. In 『ツングース語研究』 : 24-72, 汲古書院 [初出 : 1959 『国語研究』 9: 34-73, 国学院大学国語研究会].
- Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, & I. Ja. Fedjaeva (2008) *Uiltadairisu: Govorim po-uil'tinski, Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo*.
- Malchukov, A. L. (2003) “Russian interference in Tungusic languages in an areal-typological perspective”. In P. S. Ureland (ed.), *Studies in Euro linguistics*, : 235-251, Berlin: Logos Verlag.
- Novikova, A. I. & L. I. Sem (1997) “Orokskij jazyk”. In *Jazyki Mira: Mongol'skie Jazyki, Tunguso-man'chzhurskie Jazyki, Japonskij Jazyk, Korejskii Jazyk*, 201-215, Moskva: Izdatel'stvo INDRİK.
- Ozolinja, L. V. (2001) *Oroksko-russkij Sloval': okolo 12000 Slov*, Novosibirsk: Izdatel'stvo SO RAN.
- (2002) “Orokskij jazyk”. In V. P. Neroznak, *Jazyk Narodov Rossii: Krasnaja Kniga*, 143-148, Moskva: Rossijskaja Akademija Nauk.
- Petrova, T. I. (1967) *Jazyk Orokov (Ul'ta)*, Leningrad.
- Roon, T. (1996) *Ujl'ta Saxalina: istoriko-etnograficheskoe issledovanie traditsionnogo xozjajstva i material'noj kul'tury 18- serediny 20 vekov*, Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe Oblastnoe Knizhnoe Izdatel'stvo/ Saxalinskij Oblastnoj Kraevedcheskij Muzej.
- Tsumagari, T. (2009) “Grammatical outline of Uilta (revised)”. In *Journal of the Graduate School of Letters, Hokkaido University*, 4: 1-21, Sapporo: Hokkaido University.

## Some Topics and Prospect for the Studies on Northern Dialect of Uilta

Yoshiko YAMADA

(Graduate student, Hokkaido University)

Uilta, one of the indigenous languages of Sakhalin, is divided into 2 dialects: Southern Dialect (a.k.a. Poronaisk Dialect) and Northern Dialect (a.k.a. East-Sakhalin Dialect). There are found, however, few comparative descriptions of them, and the dialectal differences are mostly still open. The present paper aims to suggest some topics for the studies on the Northern Dialect, comparing with the Southern Dialect. The contents are as below:

0. Introduction
1. Dialect classification of Uilta
  - 1.1 Regional groups
  - 1.2 Dialect classification
  - 1.3 The previous description: *Ikegami* (2001)
2. Topics for the study on Uilta Northern Dialect (1): based on *Ikegami* (2001)



- 2.1 Phonemes and difference of phonetic values
- 2.2 Single occurring voiceless velar stop in intervocalic position
- 2.3 Fusion/ agglutination with imperfective verbal-noun-ending
- 2.4 Nominal predicate constructions
- 3. Topics for the study on Uilta Northern Dialect (2): other problems
  - 3.1 The word order
  - 3.2 Hearsay forms in the folklore texts
- 4. Conclusions

These are just some tentative proposals for future studies and discussions. The dialectal i.e. regional differences of the Uilta language are possibly connected with influences from other languages. It is expected that such dialect studies will lead to the expanded comparative studies with the various languages on Sakhalin.